

# 令和 7 年度入学者一般選抜入学試験問題

## (B 日程 人間生活学部 子ども学科)

### 小 論 文

#### 注意事項

- 1 試験時間は、午前 10 時から午前 11 時までである。
- 2 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 3 この試験では、問題冊子(3 ページ)、解答用紙 1 枚及び下書き用紙 1 枚を配付する。
- 4 試験開始の合図があつてから、解答用紙に**受験番号を必ず記入すること**(氏名の記入は不要)。
- 5 解答は、解答用紙の所定の欄に**横書き**で記入すること。所定の解答欄以外に記入した解答は無効である。
- 6 問題冊子及び解答用紙にページの欠落や印刷不鮮明な部分等がある場合は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 7 原則として、試験時間中の途中退室は認めない。  
ただし、具合が悪くなった場合、トイレに行きたくなった場合等は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 8 試験終了の合図があつたら直ちに筆記用具を置くこと。
- 9 試験終了の合図があつて筆記用具を置いたら、机の上に問題冊子と下書き用紙を重ねて置き、その上に表にした解答用紙を重ねて置くこと。
- 10 試験監督者の許可があるまで退室しないこと。

次の【資料1】と【資料2】を読み、二つの資料の筆者の主張を踏まえながら、「学ぶということ」について、600字以上800字以内で論じなさい。

【資料1】

動物は共鳴することを知っています。

子どもたちと一緒に、虫捕りのために山に行った時のことです。山から下りてきたとき、とても暑かった。犬を散歩で連れてきていた人が、海岸で犬を放すと、犬は海に飛び込んでうれしそうに泳いでいました。動物と海は共鳴しています。

子どもたちもさぞかし海に入りたいだろうと思って見ていましたが、誰も海に入りません。勝手に泳いではいけないと思っている。いまの子どもは犬ほどにも幸せではないかもしれません。

江戸時代末期に日本を訪れたある外国人が、「子どもたちが幸せそうにしている」と旅行記に書いていたのを読みました。当時はたくさん子どもが生まれても死んでしまう子どもが多かった。あっけなく亡くなってしまう子どもを見ていたから、親は子どもの時代を存分に楽しませてやろうと思ったのでしょう。

現代は子どもがそう簡単には死ななくなり、子どもの人生は、大人になるための予備期間になってしまいました。「将来」という言葉で子どもの人生を縛って、子どもの時代を犠牲にしてしまうのです。

暑いときに冷たい水に触れると、「気持ちいい」という感覚が皮膚を通じて入ってきます。それを感じるのが共鳴です。共鳴は身体や感覚で感じるものです。

いまの子どもはそういう身体感覚を経験することが減っています。いろいろなことを体験させようと言っている人は多いのですが、どうもピンときていないように思います。

知人の崎野隆一郎さんは、栃木県の茂木<sup>もてぎ</sup>で、夏休みに「三十泊三十一日キャンプ」というプログラムを行なっています。何もない森の中で、屋根のついた小屋だけがある。そこで子どもたちは、朝から晩まで身体を動かして暮らします。毎朝自分で水を汲み、マッチなしで火を起こさなければご飯が食べられない。トイレも階段を百段くらい上らないといけない。

キャンプ中、手取り足取り教えるようなことはしません。そこで学べる一番のことは身体性です。人間にとって、自分の身体性は最も身近な自然です。自然は思うようにならない。それを自分で理解するのです。子ども自体が自然ですから、一日、二日で慣れていきます。日常の中に必然性が組み込まれていると、自然に親しむも何もなく、ひとりで親しんでしまうわけです。ボタンを押せばなんでもできる生活では、こうした身体性は育ちません。

私がお手伝いしている「ROCKET」というプロジェクトがありました。東京大学先端科学技術研究センターで、中邑賢龍<sup>なかむらけんりゅう</sup>さんの研究室が始めた、子どもたちに好きなことをやらせる異才発掘プロジェクトです。

そこに、子どもたちが描いた絵が飾ってありました。これまで見たこともないような素晴らしい絵がたくさんありました。以前、自由学園で生徒の絵を見たときにもそんなふうに感じたことがあります。

子どもは何の役にも立たないと言われるようなことでも、長い時間、丁寧にやるものです。そうやって自由に描かせると、非常にいいものができます。

人は、美しい光景を見て、これを残したいと思ったときに詩や俳句を作ったり、あるいは絵を描いたりしています。五感で受け取ったものを言葉や絵にして表現し、人に伝えるというのは、情報に変えていくという作業です。

そういう作業はとても時間がかかります。だからどんどんやらなくなっています。

大人はその辛抱がないので、そんなふうには絵を描きませんし、子どもが絵を描いていると、すぐに「何の絵？」と聞きます。学校では「いますぐやりなさい」「時間内に書き終えなさい」と言います。考えているだけで時間が終わってしまう子だっているはずですよ。

同じようにコンピュータを使うにしても、野球を好きな子どもがエクセルで作った野球のスコア表を見せてもらったのですが、行や列ごとに色付けをしていて、その表自体がアートだと思うほどきれいに作られていました。

子どもは色をそのもので見えていますから、色使いもハッとさせられます。大人がパソコンで書類を作る際、ハッとさせる色使いにできる人が少ないのは、五感で受け取ったものを表現しなくなっているからです。

見たものを絵や言葉にするのにはとても時間がかかりますから、だんだんと写真に撮ったり、単純な言葉で表現したりするようになりました。社会全体を見てもそうです。カバン一つとっても、大量生産でたくさん作れるようになる時代になると、職人が一つひとつ丁寧に作ったカバンの格が下がってしまいます。

私は、五感で受け取ったものを絵や詩に表現し、情報化できる人がたくさんいる社会が健康だと思うのです。

この「情報化」は、情報処理とは違います。情報処理は、すでに情報になっているものをどう速く処理するのかということです。たとえば、大学入試のセンター試験（現・大学入学共通テスト）は、情報処理が速い人が有利ですよ。

社会が近代化するにつれ、情報処理のスピードが求められる一方で、丁寧に情報化する作業を切り捨てるようになっていきました。だから私は、山に行け、田舎に行けと言うのです。

都会育ちの人は、山に行っても、何をしたらいいかわからないと言うかもしれません。山に行っただけの子どもは、そこでの遊び方がわからないでしょう。でも、それでいいんです。その、途方に暮れた状態から始めればいい。そこで自分なりに楽しみ方を見つけていく。そこから、自分の組み立て直しが始まる。「森に行くと、どんないいことがあるんですか」という質問をしているうちは、何も見つかりません。まずは行ってみるんですよ。

どんな効用があるのかわからなければ、行きたくない、というのは寂しい考え方です。そういう思いがまず頭にあるから、頭にあることしか体験できなくなってしまうのです。豊かな生活と言われながら、人生が貧しくなっているのは、ここに一番の原因があります。

時々自然の中に入っていくことは、すべての人にとって、プラスの意味をもっているはずですよ。そこでは、少しだけかもしれませんが、人生が豊かになっているのです。

出典：養老孟司『ものがわかるということ』祥伝社、2023年、一部改変

## 【資料2】

わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、<sup>あわ</sup>憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけだした知識は、しっかりと身につきます。

消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。

もし、あなた自身は自然への知識をほんのすこししかもっていないと感じていたとしても、親として、たくさんの子どものことを子どもにしてやることができます。

たとえば、子どもといっしょに空を見あげてみましょう。そこには夜明けや黄昏<sup>たそがれ</sup>の美しさがあり、流れる雲、夜空にまたたく星があります。

子どもといっしょに風の音をきくこともできます。それが森を吹き渡るごうごうという声であろうと、家のひさしや、アパートの角でヒューヒューという風のコーラスであろうと。そうした音に耳をかたむけているうちに、あなたの心は不思議に解き放たれていくでしょう。

雨の日には外にでて、雨に顔を打たせながら、海から空、そして地上へと姿をかえていくひとしずくの水の長い旅路に思いをめぐらせることもできるでしょう。

あなたが都会でくらしているとしても、公園やゴルフ場などで、あの不思議な鳥の渡りを見て、季節の移ろいを感じることもできるのです。

さらに、台所の窓辺の小さな植木鉢にまかれた一粒の種子さえも、芽をだし成長していく植物の神秘について、子どもといっしょにじっくり考える機会をあたえてくれるでしょう。

子どもといっしょに自然を探検するということは、まわりにあるすべてのものに対するあなた自身の感受性にみがきをかけるということです。それは、しばらくつかっていなかった感覚の回路をひらくこと、つまり、あなたの目、耳、鼻、指先のつかいかたをもう一度学び直すことなのです。

出典：レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳、新潮社、2021年